

オタマジャクシが生まれたよ！ 若葉台保育園（福島県いわき市）

[4、5 歳児]

事例 卵からオタマジャクシへ

3月下旬、5歳児は田んぼまで散歩に行く。「暖かくなってきたから、何かいるよね」と、何か（生き物）を探して歩く。田んぼで卵を見つけ「これ卵だ、オタマジャクシの卵！だって水族館で見たのと同じだもん」A児「持って行きたい」と話題になり、持っていったビニール袋に卵と少しの水を入れて持ち帰る。



① さっそく飼育ケースに入れて、異年齢児にも見えるように通り道になる共有スペースのテラスに置く。5歳児は卵を観察しながらやりとりをする。

B児「ねえ、どうして卵、くっついてるんだろうね。なんか気持ち悪い感じするよね」「敵に食べられないようにだよ、きっと。小さいからすぐに飲み込まれちゃうからつながってるんだよ」「くっついてた方が、温かいからじゃないの？」

② 4歳児も興味を示し、翌日、田んぼに4・5歳児合同で出かける。

5歳児に場所を教わり、4歳児も卵と水を探って帰る。

③ 4月初旬、つながっていた卵が1つ1つ離れていくことに気付く。

「どうして？」と、さらに真剣な観察が続く。

④ 4歳児は保育室で飼育している。飼育ケースのオタマジャクシの卵に変化がない。

「なんで？さくら組さんのバラバラになったのに」「ちっとも変わらないよ、どうして？」

「同じ場所டுத்தオタマジャクシなのに？」「すみれ組のは何かが違うんだよ」

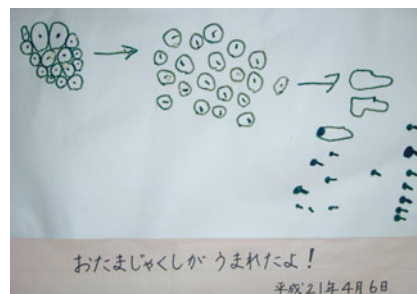
⑤ 「よく見ると、卵の中の黒いのが、オタマジャクシの形になってきた」と、B児。丸い卵の殻はどこへいったのかが、疑問となっていた。「水に溶けた？」「オタマジャクシが食べちゃった！」と、子どもたちの予想。

⑥ A児・B児が、卵からオタマジャクシになっていった様子を絵に描いてみんなに知らせる。

⑦ オタマジャクシになり大きくなると飼育ケースでは狭くなってきたので、2つの水槽に分けて飼育する。田んぼの砂を入れた方がよいと思う子と水だけでいいと思う子がいるので、話し合っ「田んぼの土と水」と「汲み置き水道水」のそれぞれのケースで飼育する（試す）。

⑧ オタマジャクシの餌を考えたり調べたりして、金魚の餌やかつお節、ホウレンソウなどを餌にする。餌をあげていると水が濁るようになる。「水が汚くて死んじゃう」「水道の水は絶対ダメね！」「バケツにとっておくのがいい」「田んぼも雨が降るから、雨の水ならいいんじゃない」と話し合い水を取り替える。

⑨ 「おなかグルグルだよ！」「目が離れてる！」など気付き、その様子をよく観察し絵に描く姿が見られる。



<主な配慮点と子どもの様子>

オタマジャクシからカエルになるまでの期間が子どもたちには長く感じられたようで、子どもの関心も薄れてきた時期に、卵を採取した田んぼへ再び出かけた。そこで、自分たちのオタマジャクシと田んぼのオタマジャクシを比べ、その違いに気付き、子どもなりの論理でその理由を考えていった。

ポイント

「田んぼで見つけ自分たちで捕ってきた」「きっとオタマジャクシの卵だと思う。本当にそうかな」「4歳の卵は同じはずなのにオタマジャクシにならない」などといった興味の深まりにより、卵からオタマジャクシになる細かな変化に気付いています。固まっていた卵が1つずつバラバラに離れていく様子や、卵の中の黒い丸が次第にオタマジャクシの形になっていく様子など、気付いたことを丁寧に描き表わし、友達に伝えようとする姿から科学する心の育ちが伝わってきます。